

何度でも

パッパ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後漢末期。不死鳥と呼ばれた一人の男がいた。

「はっはっはー！虎穴に入らずんば度胸を得ずですぞ！」

……
なんやこいつ。

目次

新たな人生！素晴らしい響きですな！

1

謙虚で誠実な人ですぞ！

5

学問？何のことやら

10

え？嫁は誰かと？愚問！そんなもの、全

員に決まっておりますぞ！

17

発破をかけましょうか！

26

新たななる人生！素晴らしい響きですな！

どうも皆様！こんにちは？こんばんは？それともおはようございますで御座いますでしょうか。お初にお目にかかります。恋姫世界にチート持ちで転生する山田ともします。先程までは冴えない中年をしていたのですが、何故か転生する事になってましてな！… え？苗字が平凡？はっはっは！そんなこと言われましてもどうしようもできません。え？普通に喋れ？すみませぬ。私、形から入るタイプでして昔に転生するんですから昔っぽい喋り方を練習しております。ご容赦下さいませ。

突然ですが皆様、恋姫無双というゲームをご存知でしょうか。北郷一刀という学生がタイムスリップし、何故か女の子の三国志の文官や武官と絆を結んでいく物語でございます。夢想や萌将伝なんかもございましたな。

転生してなにをするのかって？転生した恋姫世界において私がやりたい事…それは死亡などの回避。または北郷一刀の魏ルートエンド阻止などがございます。

勿論、チートだヒヤツハー！などと言って暴れまわったりハーレムを築いたりなどは致しません。私は主人公のハーレムを見ているだけで満足ですので。寝取り寝取られはちよつと… キツイなって…

おっと!失礼いたしました。次は私の能力、つまりチートについて話しましょう。なあと、難しいものをごいませぬ。能力はたった一つでございます。

リスポーン

という能力でございます。簡単に説明するのであれば…死にませぬ。まあ、厳密に言うとなんか死にますが、死ぬと別の場所で生き返ります。これがなかなか癖のある能力でして…例えば私が南蛮で亡くなったと致しましょう。すると生き返る場所が烏丸なんて事がございます。持ち物は服以外は全部無くなります。服を残してくれるだけありがたいですな!

え?能力はこれだけかって?はい、これだけにございます。行き過ぎた力は身を滅ぼすと聞きます。ですので世にいう子供の頃からの努力チートというものをやってみようかと思えます。まあ、勿論ガチムチマツチヨになるつもりはございませぬ。あくまで自衛が出来る程度を目指していきたいと思えます。

チーン

おや?どうやら転生する準備が出来たようですな!いやあ、最初はどの土地でどのような人がいるのでしょうか。ワクワクしてきましたぞ!それでは皆の者!またお会

いいたしましょう。

はっはっは。遂に転生をしましたぞ！私はこの時より！第二の人生を送りまする！
といますか。私、とんでもない事に気付いてしまいました。

「—————」

「—————」

言語が理解出来ませぬ！はっはっはー。

4 新たなる人生!素晴らしい響きですな!

さて、
どうしましょう
(汗)

謙虚で誠実な人ですぞ！

この度は出産の意味でもめでたく転生致しました！山田でございます！さてさて言語が全く分からない私は一体どうすれば良いのか！簡単に御座います。努力チートをすれば良いのです！言葉が分からないなら、わかるようになればいいじゃない！英語は得意でしてな、それと同じ感じで学べばようございましょう！

「あらー可愛いわあ。食べちゃいたいわあ」

そう思っていた時期が、私にも御座いました。どうやら私の勘違いだったようでした。赤ん坊の聴力が弱く上手く聴き取れないだけだったようです。いやあ、これはテヘペロですな！まあ、リアル後漢末期ではなく恋姫世界ですので日本語じゃない方がおかしいのでしようがね。

「ずっと見ている飽きないわあ…」

そして先程から私に愛を呟いているこの女性。この方がどうやら私の母親のよう

すな。父親は出稼ぎか何かで家には現在居ないようで私は見た事がございません。

いくら身体は赤ん坊でも精神は大人、やはり母親ではなく他人と見てしまつて少し居心地が悪く、成長しても遠慮気味な関係になつてしまふのでありましようか。あ、母上!鼻毛が出ておりますぞ!わたくしが引っこ抜いてあげましよう!

「あーぶーだー」

「ん?なあに?」

「だーだーどうー」

「……可愛い可愛い!!」

駄目ですな、赤ん坊なのでうまく声が出せませぬ。

「もう!可愛すぎておでこにちゅーしちやう!ちゅー!」

今です! (孔明)

「ん?痛つ!痛たたたたた!ふぎや!」

ふう、取れました。はっ!母親の鼻毛処理をする赤ん坊はもしかして私が人類初なのでは?にしてもこの鼻毛。太いですな。いや、私が小さいので大きく見えるだけですかな?

「もー、なにをするの!悪い子にはお仕置きよ!こちよこちよ!」

「きやつきやつ」

実の所全然こそばゆくは無く鬱陶しいのですが笑わないと母上の機嫌が悪くなり最悪泣き出すので笑ってあげております。親と子がもう逆転してしまいましたな！流石私！

おっと、笑い疲れて眠たくなってしまいました。母上、すみませぬが先におやすみさせていただきます。

「だあ……どう……」

「あら、笑い疲れちゃったのかしら？ふふふ。おやすみなさい」

そんなこんなで八年程月日が流れました。

私は八つになり、家の畑仕事などを手伝うようになりました。

この八年間、父親の姿は見えていない為亡くなっているのではないかと思うております。そしてこの話題には触れないようにしております。

成長して流暢に喋れるようになりましたので村の皆様とよくコミュニケーションをとっております。周りから見たら小さな子供が迪々しい言葉で喋るのできつと微笑ましく思っている事でしょう。おや、あそこにいるのは向かいの家の龐徳おば様はありませぬか!早速おしゃべりですぞ!

「お婆様、今日もいい天気で顔の皺がよく見えますな!」

「ははは、その距離では皺はよく見えないでしょう?もつと近くに寄りなさいな」

「…… 戦略的撤退!」 タタツ

「こらっ!待てっ!逃すかっ!そしていつも言っているが私はお婆様という年齢でもないぞ!まだ25だ!」

「またまたお婆様、最近小皺が目立っておりますよ?夜更かしでもしたので御座いますしょう?お肌の敵ですぞ?ん?これは少し老けてみられても仕方ありませんなあ?」

「うっ (凶星) : : 待てやこのクソ餓鬼いいいい!!」

「私はクソ餓鬼などではございませぬ。謙虚で誠実な男の子でございます。その所、よろしく願いますよ?」

「ほぎけえええええええ!!」

「はっはっはっ、毎日の畑仕事で鍛えられたこの足に追いつけるはずがありますまい。では!」

いやあ、今日も長閑ですな。

学問?何のことやら

やあやあ皆様どうもどうも。

ひよんなことから恋姫世界に転生した山田と申します。

私は只今…

「ねえ、塾に興味はない?」

「ブフオ」

「??」

なんか勧誘されております。

彼女は龐徳おば様の妹である司馬徽姉様、龐徳おば様からは酔狂と呼ばれております。いくら短気で口が悪いからといって実の妹の事を酔狂などと… 龐徳おば様の方がよっぽど酔狂だと私は思いますな!

「こつ、こいつに学問とか… あははっ!… 無理だろっ… ぶふっ… こ、こいつ文字すら読めないぜっへへ」

腹を抱えて笑い転げる龐徳おば様… ぶん殴りてえ… おおっと私とした事が口が悪くなつてしまいました。反省反省。

「失礼ですな、私も頑張れば文字くらい……」

漢文程度、本気を出せば余裕にございます。多分。

「ほう？読めるのか？」

そう言つて懐から何かの本を取り出し私に見せる。

………
題名すら読めませぬ。

「……無理にございます」

「ほらな？つてか水鏡、お前男苦手だろ。なんで最初に誘つたのがこいつなんだよ」

「おや？司馬徽姐様は男性が苦手で？」

「禰衡君は大丈夫なんです。文字はこつちで教えるから心配ありませんよ姐さん」

この二人本当は血繋がってないのでは？

おおっと、そういうえば皆様には話しておりませんでしたな。

私、姓を禰、名を衡、字は正平と申します。真名はまだ母上にいただいておりませぬ。

10歳になったらいたただけるそうで……後2年。楽しみに待つ事にいたしますよう。

「禰衡君、どうかしら？」

うむむ、めんどくさそうですなあ……よし、適当な理由をつけて断る事にいたします

しよう。

「しかし、母上の許可を「それならもう取りましたよ」……」

くつ、根回しが既に。

「ですが私は文字すら読め「私が一から教えるので心配いりません」..」

くつ、司馬徽姉様優しい。

「私にも準備というものが「今、あなたのお母さんが荷物を纏めてくれます」..」
くつ、有能な母上。

「母上を一人残していく訳には「それなら俺が面倒見てやるから心配すんなよ」.. 龐徳
おば様は反対派では?」

「別に反対はしてないぜ?文字が読めない事で水鏡に迷惑をかけないか心配しただけ
だ。因みに私は賛成派だ」

なん..だと..しかし、彼女は龐徳おば様なのです。絶対に何か黒い理由があるはずにございます!

「そのところは?」

「お前が不思議で面白いやつだからだ」

.....
???

「..それだけにございますか?」

「ああ、それだけだ」

「ええ..」

なんか……馬鹿らしくなってきましたな。

(姐さんったら……素直じゃないんだから。正直に将来が楽しみつて言つてしまえばいいのに)

「それじゃ、村の人達にお別れのお挨拶でもしてこい！」

「はあ……分かりました」

成る程、逃げ道など最初から……ん？

「お別れ、にございますか？」

「ああ、水鏡が買った塾になるボロ屋はここから遠い山んだ。暫くは村に帰つて来られないだろうからな」

「ま、誠ににございますか？」

「ああ、誠だとも」

先程から驚く事ばかりで整理が出来ておりませぬ。分かっている事は私が塾に行く事は決定事項だと言う事……ここは散歩をしながら村の皆様にお別れを言いつつじつくりと整理するべきですな。

「村の皆様にお別れを言つて参ります」

「ああ」

「では、失礼致します」

「なあ！お前だつて見ただろ!?トボトボと村のみんなにお別れを言いに行く禰衡を！あれを見て苦しむなつていうのか！無理だああああ!!」ジタバタジタバタ

「姐さんもいいじゃないかと言つてくれたではありませんか。禰衡君の才は眼を見張るものが有ると」

「確かに言つたけどお！小さいのにあんなに人を煽れるんだぞ？凄いいじゃないか！あれは素晴らしい才能だ！」

「そんなに凄いの？」

「ああ、私は何度も煽られた事がある！罵られた事もあつた！」

「姐さんよく怒らなかつたわね」

「何を怒るのだ？禰衡の煽りや罵倒だぞ？ご褒美じゃないか！」

「…… 確かに」

もう駄目だなこの姉妹。

「その禰衡に会えなくなるんだぞ？やだやだやだやだやだやだやだやだ！」

先程とはまるで別人のように駄々をこねる龐徳に司馬徽は困つた。しかし流石水鏡先生というべきか、この状況を一瞬で解決する事が出来る神の一手が頭に浮かんだ。

「姐さん、耳を貸してくれないかしら」

「なんだよ水鏡！いいよなお前はこれから毎日禰衡と会えるんだか「姐さんも私の塾で

教師として働かない?」ら…え?」
「……………」

見つめ合う二人は暫しの沈黙の後

ガシツ

握手を交わした。

ま、ボロ屋を直さないといけないから教師として来れるのは半年後くらいかしらね?
それまでは私と禰衡君は二人きりで塾を建て直すのよ…ふふふ。そう、見放題なのよ…何もかも…。

え？嫁は誰かと？愚問！そんなもの、全員に決まっておりますぞ！

やあやあ皆様どうもどうも。

司馬徽姉様の塾に行く事になってしまった山田にございます。学問が学べて嬉しさ半分、不安が半分と言った所にございますか……。

え？学問が学べるが身につくか不安？確かに私は違う時代の人間ですので難しくはあるでしょう。ですが不安ではありません。

たかが恋姫世界でございましょう！リアル戦争に比べれば御粗末なものです！容易く様々な本を読破し素晴らしい軍師にでもなってみせますぞ！まだ文字は読めませぬが、目指せ！中国の毛利元就！

でも個人的に尼子経久派だったり……おっと、話が逸れてしまいましたな。

ええつと……ああ、不安要素の話でしたな！不安の理由はすな、ほら、私は村の皆様から慕われているでございましょう？子供達からも人気でしてな！私が居なくなる皆様寂しい思いをする事でしょう……え？それだけかって？ええ、それだけでございます。

さてさて、皆様にお別れの挨拶をせねば。

おやおや、あそこで本を読んでいるのは荀彧殿ではございませぬか!

「荀彧殿!」

「ん? 禰衡じゃない。どうしたのよ?」

「荀彧殿、実はお話がございましてな...」

「? 何よ、そんな改まつて。あんたらしく無いわね。あ、あと... そ、その... 私の事は桂花つて呼びなさいって何度も言っているじゃない! 人の言葉が分からないわけ? この女たらし! 全く、これだから男つて...」

何故罵られなければならないのでしょうか... ああ、彼女の名前は荀彧殿。ならず者に襲われていた所を私が投石でならず者を倒し、華麗に救助いたしました。所で... 明るい茶髪、真ん中で別れウエーブしている髪... 猫耳フードはありませぬがそのトゲのある性格... 人違いだと... いいなあ... いや、コネが出来たと喜ぶべきなのでしょうか...。

「で、ですね荀彧殿」

「... はあ、なによ? 私今本読んでるんだけど?」

「実は私、水鏡殿の塾に通う事になりました...」

「ふ、ふうーん。で？あんたが学問をしようが私には関係ないんだけど？でもどうしてもつて言うなら私に分からない所を教えてあげてもいいわよ？」ソワソワ

それ以前にまず文字が分かりませぬ。

「いえ、塾が遠いので泊まり込みになり暫く会えない事になるかと…」

「へー…え？」

「おや？如何いたしましたかな？まるで荀彧殿の仕える主君が皇帝にならないと言った時の様な顔をして」

「ちよつと！今なんて言ったの！」

「おや？いかがいたしましたかな？まるで「その前！」…その前？」

「ああ！塾が遠く、泊まり込みなので暫く会えないと…」

どれくらい通うのかは知りませぬが。

「カツハツ！ガツ！」

うわつ、唾飛んできた！汚ねえ！…ゴホン、これがご褒美か…いやあ、人間にも様々な方がいらつしやいますな、ははは。

「だ、大丈夫でございますか!?まるで荀彧殿が仕える主君から空の容器を送られてその意味がお前は無用無しだという意味だと汲み取り毒を飲んだようなお顔でございますぞ！」

「ゲホツゴホツ：：さつきからその例えはなんなのよ!意味わかんない!：：ハアハア：：ね、ねえ。う、嘘よね?何時もみたいに私をからってるんでしょ?そう言つてよ!ねえ!」

「ところがぎつちよん!嘘ではございませぬ。なあに、これでお別れという事ではありませぬ。暫く会えないだけにございます」

「：：どれくらいなの?」

あつ、そういえばどれ程か聞いておりませんでした。

「さあ?私も聞いていないもので：：」

「ふ、ふん!ま、まあ、精々頑張りなさいよ：：」

「はは、容易く荀彧殿を追い越して見せましょう!まあ、荀彧殿はまず私の身長を追い越す事に力を注がねばなりません!あつはつはつ!」

「あんたが高すぎるだけよ：：」

私は確かに高い方ですが、荀彧殿が小さ過ぎるだけでは?と言うと落とし穴に嵌められるので声には出ませぬ。

「おや?所で、郭嘉殿は?」

「え?凜?確か子供達と遊んでたわよ。確かあつちの方で」

私達も子供なのですが：：。荀彧殿は凄いですなあ：：。こう：：。そう!まるで見た目

は子供！頭脳は大人でございます！

「成る程、ありがとうございます。それでは郭嘉度にもこの事をお伝えせねばなりませんのでこれにて失礼」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！凜には後で伝えて置くから…その…この本についてちよつと教えて欲しい所があるんだけど」

「おお、ありがとうございます。で、どのような？」

「この、私は荒縄で縛られ、彼の雄々しい肉ほ「ちよ、ちよつと失礼？」ん？何よ」
お、落ち着け、c o o rになるのです。

「その本は一体何処から？」

「これ？お母様が楽しそうに読んでいたからこそ持ち持ってきたのだけど…まるで意味が分からないから教えて貰おうと思つて。あんた物知りだし」

荀彧殿のお母様あああああ！もつとバレない所に隠して！

え？荀彧殿相手じゃどんな所に隠してもバレるつて？否定は致しませぬけれど
もおおおお！

「……………」

「なに？もしかして分かんないわけ？まあ、普通分かんないわよね…なんでこの主人公は縄で縛られて喜んでる訳？何かの伏線？いや…そんな…」ブツブツ

それは未来の荀彧殿では：：よし！ここはすつとぼけてしまうのが上策にござい
す：：え？無知シチュ？駄目にござります！いくら性欲が溜まろうといずれやつて
くる北郷一刀殿の為に荀彧殿の初めては阻止せねば：：あ、先に曹操殿に奪われてしま
いますな：：。

「う、うーむ。すみませんがまるでわかりませぬ：：あ！それでは龐徳おば様に聞いて
みるのはいかがでしょうか！この辺りでは一番な物知りですぞ？」

龐徳おば様！すみませぬ！くつ、罪悪感が：：無いですぞ!?!ふっしぎー！

「あ、確かに：：じゃあ後で聞いてみようかしら」

ふう、これでよし。

「それが良うございます！それでは、私はこれで：：」

「あ、まだ：：行っちゃった。というか、勝手に持ち出したんだから聞いたら怒られる
じゃない：：」

私が頑なに真名を受け取ろうとしないのには理由がございます。まだ自分の真名がないという事もあります。……皆様、私の目的を覚えておいででしょうか？憶えていないのであればダチヨウ並みの脳味噌だなと嘲笑わせていただきます。

目的、それは死亡などの回避、または北郷一刀の魏ルートエンド阻止でございます。呉の方々を助け、北郷一刀を魏へ行かせない事、いかせてしまってもどうか赤壁の火計を成功させる事。これが目的でございます。

では皆様、魏での北郷一刀の最期を知っていますでしょうか。北郷一刀は最期、消えてしまいます。原因は歴史を変えてしまった為。

なんとこの世界では歴史を変えると消えてしまうのです！

そう、北郷一刀は三国志の流れを変えてしまい、消えました。

では、私がこの恋姫×無双の流れを変えてしまうと一体どうなるのでしょうか。多分、消えてしまうと予想しております。まあ、あくまでも予想、可能性があるだけでございます。……。

もしも荀彧殿の真名を受け取り、仲良くなったといたしましょう。それでは、お別れ

が辛くなつてしまします。

ですので私は原作の方々とは絶対に真名を交わさない、受け取らないを貫きます。愛する嫁達をを悲しませない為にも!というかむしろ嫌われねば!

でも、最近ちよつと荀彧殿が原作のツンツンではなくちよつと柔らかくなつているよ
うな... もしも同姓同名の別の荀彧とかいうオチではござりませぬよね?

「アイタア!」

「今、他の女性の事を考えましたね?」

「いや、ちよ、郭嘉殿!そのような事はいでえ!」

彼女の名前は郭嘉殿。キツイ目に顔の輪郭をなぞるように伸びている髪、眼鏡はして
おりませぬがほぼほぼ確実に原作郭嘉にございましょう... 鼻血をまだ見た事がござ
いませぬので何とも言えませぬが。

「暫く居なくなるのでしたらその… 沢山構ってください！」
なにこの子可愛い。

「そのような事でしたらお安い御用にございまする」

「あつ… えへへ…」

ふむ、鼻血が出ない… そうですな！この広い中国で原作キャラに合う方が難しいの
でしたな！あつはっはっ！よーし！撫でくりまわしてやりますぞお！

この後めちやくちや撫で撫でした。

発破をかけましょうか!

とある少年が今、故郷を旅立とうとしていた。

「それでは皆様、行つて参ります」

どうも皆様、山田で御座います。

この度私は村を出る事になつてしまいました。

この村で学んだ事を、私は忘れるまで忘れませぬ!

朝から晩まで鋤を振るつた事。合間の時間に子供達と遊んだ事。龐徳おば様と追いかけてこした事。ああ、剣を学んだ事もありましたなあ。才能があるぞ!と言われましたが実感がないのでなんとも……。

次に学ぶのは文ですのでそつちの方も才能があると……いいなあ……。

「いつてらつしやーい!」「またねー!」「立派になつて帰つて来いよー!」「また一緒にお出かけしようねー!」「いくよ?セーのー!」

『でいこーにいちゃん!』

「おや?ちびっ子達?」

すると一人の男の子がこちらへ走ってくる。

おや？あれは戯志才君ですな。郭嘉殿の親戚の子で、よく肩車をねだる子です。

「どうしました戯志才君。そういえば郭嘉殿達は？先程から姿が見えませぬが。」

「郭嘉ねーちゃんは荀彧ねーちゃんはどこかに行つたよ」

「そうですか」

そうっ！嫌われれば見送りに来るはずがない！勝つた！この為に私は心を鬼にして真名を絶対に言わなかつた！ついに私は嫌われる事が出来たのだ！ふはは！…いや、待てよ？真名を呼ばないだけで嫌われるとは考え難い。他に何か理由があるはずだ。荀彧殿は男嫌いで十分な理由だが、郭嘉殿は一体？むむむ。

「でね！でね！…はいっ！」

「これは？」

「ぼくたちで作つたお守り！あげる！」

そう渡されたのは動物の骨と赤の紐を編んで作られた結び飾り。

「…これはこれは見事な結び飾り。有り難く頂戴いたします」

「えへへ」

懐に大事にしまつておきましょう。もしかしたらこいつが無けりや死んでたぜ…的な事になるやも知れませぬ。

さてと、最後にきちんと好感度を下げておかねば。本編にキャラとして出ては居ない

がもしかしたら…：もしかしたら関わるキャラかも知れませぬ。保険はかけておいて損はない故。

「皆様方！」

少年は大きく声を張り上げた。子供とは思えぬ程大きな声を。そして、一人の少女を見た。少しキツめの目をしており、カウボーイハットを被っている小さな少女を。

「私は司馬徽姉様の下で立派な男になって見せます！そして！立派になって帰ってきた時は！」

スタスタとその少女へと向かい、少年は膝をついた。そして、スツと右手を差し出した。

「うわわ。な、なにさ」

「徐庶、結婚しよう」

徐庶と呼ばれた少女の頬はみるみるうちに赤くなり、身体から発される熱を逃すようにバタバタと手を振る。

「えっ／＼／そっ、そんな！こんなみんなが見てる前で！桂花達にも悪いし…：。でも…：君がどうしてもって言うなら…：僕は…：いいよ？」

うるうるとした瞳で少年を見る。忙しく動いていた手はもう動いておらず少年の手を取っている。少年はその手を握ると立ち上がった。少女はゆつくりと、立ち上がった少年の顔へ自らの顔を近付けていく。そして、少年は口を開いた。ああ、この開いた口を塞がないと……。

「冗談にございます」

「……………えっ？」

「ですから、冗談でございます」

ドツキリ大成功！乙女心を弄ぶと言うのは心苦しいのですが、これも嫌われる為でございませう。

徐庶元直、恋姫では名前が出るもののキャラとしては出ず、きつと本筋と関わる事は無いでしょうが、無いとは言いい切れない。故に、嫌っていただきますぞ。

「……………殺す」

おんやあ？その様な木刀で何を……って危ねえ！急に斬りかかって来ましたな。ま、この様なとろとろとした木刀などには当たりませぬがね！龐徳おば様の投石より遅い遅い！速さが足りませぬなあ！

「ハハハハッ！当たりませぬなあ？」ヒヨイヒヨイ

「くっ……仕方ないだろう！僕の才能じゃ……この程度が限界なんだ……やっぱり僕に

武は無理なんだ」

うっ、少しやり過ぎてしまいましたな。徐庶殿は少々ネガティブで、直ぐ自己嫌悪に陥ってしまいます。徐庶殿には剣の腕を鍛えて貰わねば。もしかしたら魏√か蜀√なら関わるかも知れませぬし、何かの役に立つかも知れませぬし。少し、発破をかけてあげましょう。

ガシッ

「ひゅっ!?!」

「徐庶殿」

人と話す時は視線を合わせて。ちよつとこの中腰キツいな。我慢我慢。

「うわわ／＼／＼。!?!どうしたんだい。そんな真剣な顔をして、君らしくもない」

「徐庶殿、これから世の中はガラリと変わります。賊が蔓延り、天は墜ち、皆様がバラバラになる時が来るでしょう」

「い、一体何を言つて…」

「その時に、その様な剣技では仲間を繋ぎ止める事など出来ませぬ。ましてや、自分を守る事すら出来ませぬ。徐庶殿、貴女の夢はなんでしたかな?」

「… 皆んなを… 護る事」

「ならば今よりもつと努力なされよ。才能が無い? その様な事はありません。私が保証

しましよう。貴女は……強くなれる！」

「僕は……強くなれる？」

「ええ。そうですなあ……次に私が村に戻ってきた時に手合わせをしましょうぞ！まず私を倒す事、これを目標に致しましょう。まあ、負ける気は御座いませぬがな！」

「禰衡を……目標に……うん！夢の第一歩として、まずは君を倒す！」

「うむ、その意気ですぞ！」

ふう、徐庶殿はとて純粋で素直です。立ち直るのも早い。

これは扱い易い。

「だからこれからは……君を想って修行をするよ！これが一番強くなれると思うから……／＼。そ、そしてっ！君を倒したら僕と！けっ、けけけけっ／＼／＼」

鶏ですか？さて、更に好感度を下げるとしましょうか。

「ええ。更に、兵法書を読んでいると言いなから艶本を読んでいる時間を修行する時間に変えれば、もつと強くなると思えますな」

「……えっ？」

「おや？バレていないとお思いで？まだまだに御座いますなあ！」

「……ぶち殺すう！」

いやあ、流石に艶本を机に置きっぱなしで寝落ちされては……徐庶殿お母様からも相

談されましたし。　　つてうおっ！だから木刀危ねえ！ですが落ち着いて見れば避ける事は容易い。

「あつはつはつ！この村に帰る時が楽しみですなあ！」ヒヨイヒヨイ

さて、そろそろ反撃を。　　デコピンでよろしいですかな。

「死ねえええええ！あうっ！」

「この徐庶殿がどれだけ強くなるか楽しみですな。さて、司馬徽様を待たせているのでそろそろお別れを。それでは皆様！行ってまいります！」

『行ってらっしゃーい！』

「君より強くなって見せるからなー！」

そういえば、荀彧殿と郭嘉殿は…何処へ行ってしまったのでしょうか。

まあ、あの二人なら大丈夫でしょう。

あの村とは一時期お別れですか。寂しいものですか。

「あら、禰衡君。お別れは終わったのね。では、行きましょうか」

さて、そんなしんみりとした空気で居続けるわけにはいきませぬ！私には目標がある！
！気持ちを切り替えて。いざっ！新天地へ！

「あつ、荷台忘れた」

「司馬徽姉様エ・・・」